

# 姉体車堂Ⅱ遺跡

1995

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター



死傷区全景写真

## 序 文

平成5年11月に埋蔵文化財発掘調査と公開展示施設及び研修室等を兼ね備えた水沢市埋蔵文化財調査センターが胆沢城跡外郭南門前に建設されました。

今まで、市内の発掘調査は教育委員会で行ってまいりましたが平成6年4月より当センターが発掘調査はもとより考古学資料の展示、考古学研修講座等による啓蒙活動の推進を合わせ実施致しております。発掘調査に終わるだけでなくそれらの文化財のもつ貴重な意義について理解し保護しようとするそんな方向にセンターが機能すれば幸いであると考えております。

現在水沢市内には263か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。更に、平成6年度には8か所を発掘調査致しました。(石田Ⅱ遺跡、中平遺跡、熊野堂遺跡、車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡、跡呂井館跡遺跡、胆沢城跡、常盤広町遺跡)胆沢城跡を除き7か所の調査は開発計画や個人住宅建設に伴うものであります。埋蔵文化財について従来の考え方は、「まず保護しよう」ということで推移してきたが、現在では「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」というものになってきています。このような考え方にそって私どもは発掘調査にあたりております。また、そのような主旨のもとに消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を帯びた報告書であることを自覚し本書の作成にあたりました。

また、速報展により各遺跡の発掘状況や結果については、写真や図で、遺物は展示してお目かけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成7年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター  
所長 及川由己

## 例 言

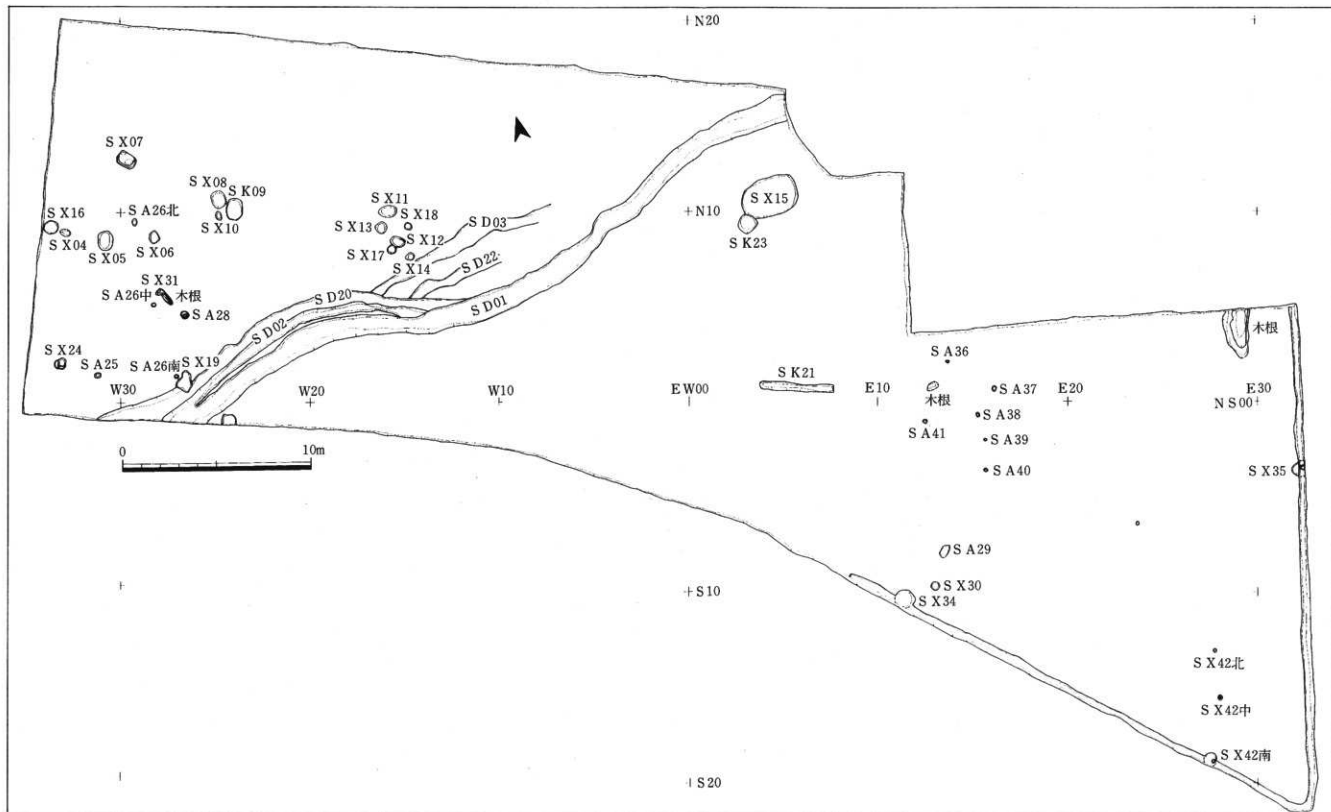
1. 本書は、岩手県水沢市姉体町字稗田下61-1外に所在する姉体車堂Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、姉体地区土地区画整理事業に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
3. 姉体車堂Ⅱ遺跡の調査対象面積は1,950㎡であり、うち調査実施面積は1,420㎡である。
4. 発掘調査期間は平成6年10月12日～平成6年11月5日、以後、平成7年3月31日まで室内整理作業を行った。
5. 発掘調査は、伊藤博幸、高橋千品が担当した。
6. 本書の作成は、遺構、遺物の実測及びトレースは調査担当者の外に、千田サノ子、青木綾子、渡辺弘子が行い、写真、執筆、編集は伊藤が行い、高橋がこれを助けた。
7. 本書の掲載の地形図は、水沢市都市計画図（縮尺2,500分の1）を原寸のまま使用し、スケールを付していない。
8. 本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。  
SD：溝    SA：柱穴、柱列    SK：土壌    SX：その他不明遺構
9. 調査を実施するに際しては、姉体地区土地区画整理組合の協力を得た。記して謝意を表す。

# 目 次

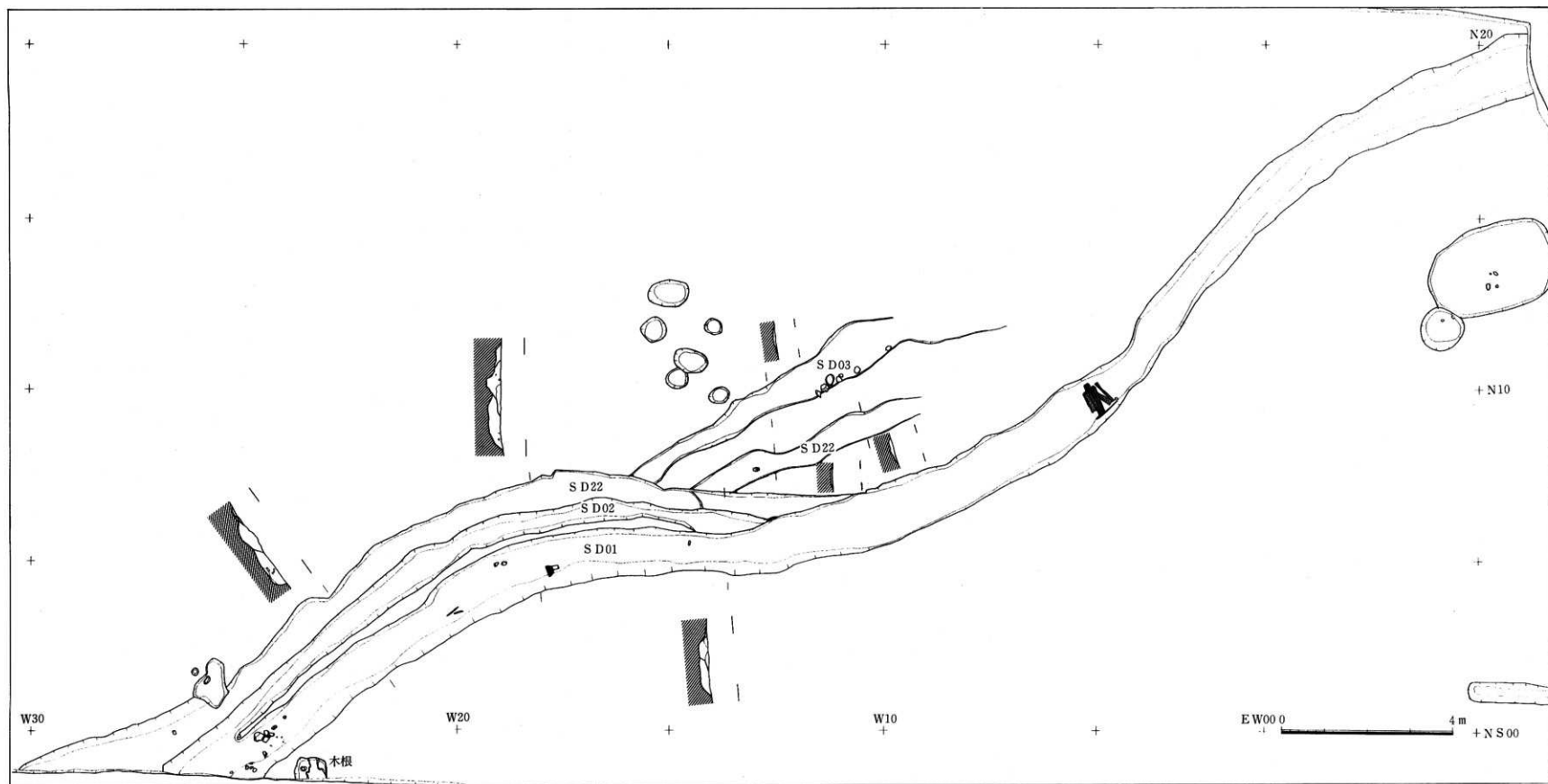
序 文	
例 言	
I. 遺跡の位置と環境	1
II. 遺 構	4
溝跡S D01・02・20	4
溝跡S D03・22	4
土壇跡S X04・24・11・18・14・30	4
土壇跡S X16・07・08・13・12・34・S K05	10
土壇跡S X06・19・17	12
土壇跡S K09・23	12
土壇跡S X15	13
土壇跡S K21	13
柱穴跡S A25・26・28・10	13
柱穴跡S A41・36・37・38・39・40・29・42	14
III. 遺 物	15
溝跡S D01出土遺物	15
土壇跡S X04・24・11・18・30出土遺物	16
土壇跡S X16・08・13・12・34出土遺物	17
土壇跡S X06・19・17出土遺物	17
土壇跡S X15出土遺物	18
柱穴跡S A28出土遺物	18
IV. ま と め	18

# 図 版 目 次

カラー図版(口絵)	.....	土壇跡S X12・14・17	
図版1	..... 発掘区全景写真	図版7	..... 土壇跡S K07
図版2	..... 発掘区全景	.....	柱穴跡S A19・25・土壇跡S X24
.....	溝跡S D01・02・20・03・22	図版8	..... 土壇跡S X08・09・10
図版3	..... 溝跡S D01・20・03・22	.....	同立割り状況
.....	溝跡全景	図版9	..... 土壇跡S K23・S X15
図版4	..... 溝跡全景	.....	土壇跡S K21
.....	溝跡S D01・02・20立割り状況	図版10	..... 土壇跡立割り状況
図版5	..... 土壇跡S X16・04	.....	上からS X11・S X08・09・10・S X12
.....	土壇跡S X04・16・S K05	図版11	..... 土壇跡立割り状況
図版6	..... 土壇跡S X11~14・17・18	.....	上からS X16・S X07・S K05



第3図 姉体車堂Ⅱ遺跡遺構配置図



第4図 溝跡SD01・02・20・03・22

## I. 遺跡の位置と環境

胆沢平野は、北西を胆沢川、南西を衣川(北股川)、東を北上川で画し、胆沢町若柳の市野々を扇頂部にして、東方に約20kmの半径をもつ円弧を描いて、北上川に及ぶ広大な胆沢川扇状地と、北上川の氾濫平野からなる。

このうち、胆沢川扇状地は胆沢川が形成した高位・中位・低位の3段丘が、南から北へ順次高度を減じながら展開する。段丘面は南の高位から北の低位へ順に、一首坂、胆沢、水沢段丘とも呼ばれる。遺跡はこの低位面である水沢段丘上にある。

市内の水沢段丘の標高は30~50mで、北に向かって高くなる。扇状地扇端部に当たる水沢段丘は扇状地特有の多くの網状河川によって開析されるが、同段丘はさらに上位と下位面に2分され、下位面はいわゆる谷底平野と呼ばれる扇状地最下位の沖積面である。この面は弥生時代以来の水田耕作地であることが発掘調査によって判明している<sup>(註1)</sup>。

水沢段丘上位面は市内南部のほとんどを占めるが、地形上は網状河川が開析した低地と、それにより形成された微高地とからなり、遺跡の多くはこの削り残された微高地にある。

本遺跡の位置は、水沢市街地の南東方4kmのところで、遺跡範囲の中央を南北に国道343号線が貫く。遺跡は旧天神川(現茂井羅南堰)左岸微高地に立地し、北側と西・南側には旧河道が残り低湿地となっている。このほか天神川流域には、左岸上流から林前遺跡、小水ノ口遺跡、寺西南遺跡、上島遺跡が、右岸上流から向田遺跡、水の口遺跡、水ノ口前東遺跡、元天神前I遺跡、同II遺跡、北白山I遺跡、同II遺跡、同III遺跡がそれぞれ河口に向かって順に立地している。このように河川流域に沿って遺跡が連続と展開するあり方は、同段丘上のさらに南側の大深沢川、宮沢川流域においても同様に見られる。

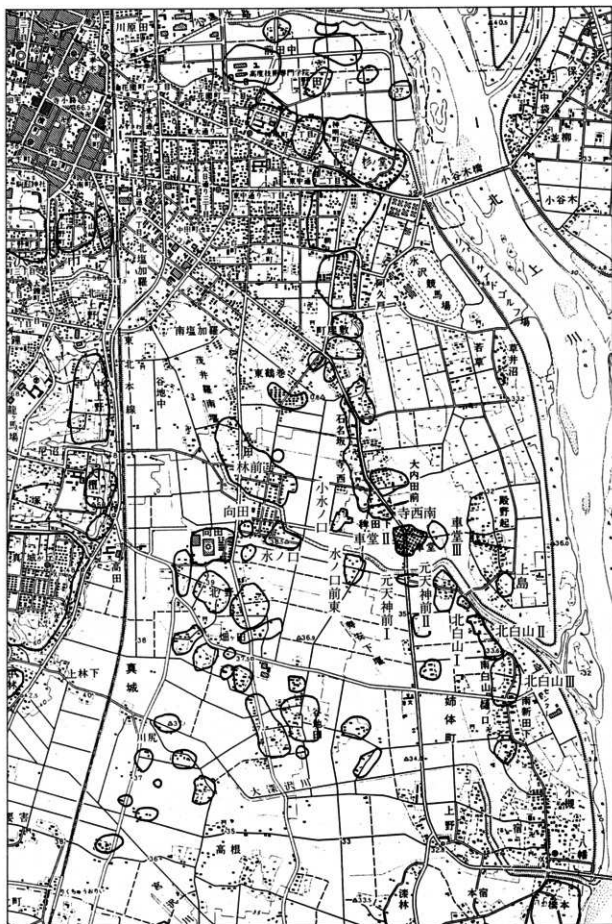
流域の遺跡の種別は、ほとんどが散布地で、平安時代の土師器と須恵器が採集されているが、唯一、元天神前I遺跡では石畿が発見されている。

本遺跡周辺の発掘調査例は少なく、僅かに林前遺跡<sup>(註2)</sup>と北余目遺跡<sup>(註3)</sup>があるにすぎない。うち林前地区の発掘調査は、1978年度の範囲確認調査を嚆矢に都合6次にわたって実施されてきており、94年度現在で竪穴住居跡25棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、その他多くの土壌跡、溝跡、柱穴跡がある。中世に属する竪穴住居1棟を除くと他はすべて平安前期のもので、9世紀を中心とした大規模な集落跡であることは確実である。水沢段丘上における当該期の拠点集落であろう。

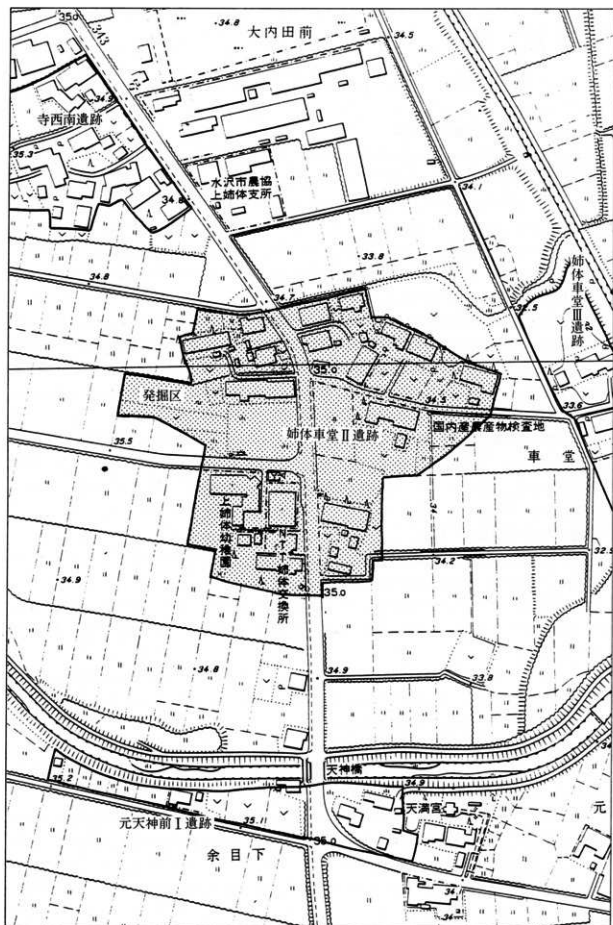
北余目遺跡は、林前遺跡の北に小支谷を隔ててある。88年度の発掘調査で、時期不明ながら畑地と推定される畝間溝跡が6条平行に発見されている。

以上が姉体車堂II遺跡周辺の立地と概況である。本年度の発掘調査は遺跡の西端寄りの部分を対象に実施した。現状は畑地である。





第1圖 遺跡位置圖 (1 : 25,000)



第2図 遺跡周辺地形図 (1:2,500)

## II. 遺 構

発掘調査で発見した遺構には、溝跡5条、土壇跡20、柱穴多数がある(図版1~11、第3図)。以下、遺構について記述する。

### 溝跡S D01・02・20 (第3・4図)

溝跡S D01は発掘区西半から東西方向に緩くS字状に蛇行して発見された素掘りの溝である。東西端は発掘区外に延びるため不明。西側では北岸が溝跡S D02によって破壊される。溝の掘削は比較的ていねいで、両岸ともに緩やかに外傾し、溝底はほぼ平坦である。規模は溝中央付近で、幅1.2m、深さ25~30cmある。この付近からは、溝岸に直交して架けた足場板5枚が南北方向に発見された。南岸には岸に平行して杭で補強した受け板部が設けられている。足場板の長さ60cm、幅20cm、厚さ3cmある。埋土は溝底付近に一部みられる酸化鉄集積細砂層を除くと、褐灰色砂質土(疑似グライ層)の単層で、酸化鉄多く混在する。土質は軟質。

溝跡S D02は、溝跡S D01西側の北岸に重複して東西方向に発見された素掘り溝である。西端は発掘区外に延びているため不明だが、東端は溝跡S D01に合流する。重複関係はS D02が新しい。溝の掘削はやや不規則で、とくに両岸の傾斜は一定しない。溝底はほぼ平坦だが、底幅は不規則である。規模は上幅で1.1~1.3m、深さ30~35cmある。埋土は上層に一部堆積する酸化鉄を僅かに含む褐色土層を除くと、軟質褐灰色グライ層の単層である。溝に付属する施設は認められない。

溝跡S D20は、溝跡S D02の北岸に重複して発見された素掘り溝で、南岸はS D02北岸の掘削によって壊されている。その他の遺存状態はS D02にほぼ合致し、東端部はS D01に合流する。溝の掘削は全体的に浅く、北岸のつくりも一定しない。規模は深さ5~13cmあるが、幅は南岸を失っているので不明。埋土は固く締まった黒褐色土単層である。溝に伴う施設は認められない。

### 溝跡S D03・22 (第3・4図)

2条ともに南北に平行して、溝跡S D01中央付近の北側から発見された浅い素掘り溝で、西側は溝跡S D20に破壊され、東端部は削平のため輪郭は不明瞭となる。

うち、溝跡S D03はS D22の北側約80cmのところを東西方向に延びる溝で、南北両岸の立上りが弱く、平面形態も不規則である。幅50~100cm、深さ10cm未満ある。埋土は基本的に黒褐色単層で固く締まる土質である。

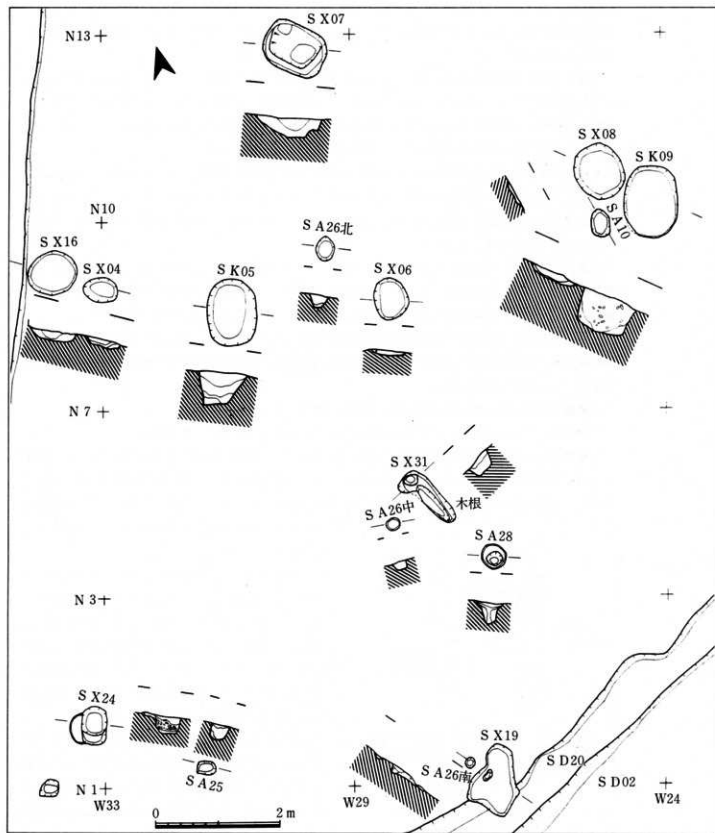
溝跡S D22は、溝跡S D01とS D03の間から東西方向に発見されたもっとも遺存部の少ない溝である。溝底の立上りは両岸ともに観察できる。平面形態は不規則だが、規模は幅約60cm、深さ5~10cmある。埋土は単一で、灰褐色砂質土の軟質グライ層。

### 土壇跡S X04・24・11・18・14・30・(第5・6・7図)

このグループは小土壇状に坑を穿ち、埋土に焼土・炭化小ブロックを多く含み、壁面の焼けていない一群で、いわゆる焼土遺構B-b)①に分類されるものである。

土壇跡S X04は発掘区西壁際中央のS X16のすぐ東側から発見された。平面形の規模は0.56m×0.4mで長軸を東西方向に有する楕円形を呈し、深さ約13cmある。壁は比較的ていねいに掘削され、わずかに傾斜して底面に至る。底はやや凹凸がみられる。埋土は厚さ約5cmの焼土小ブロックを多く含む黒褐色軟質土層を挟んで、上層に焼土と炭化粒混りの黒褐色土層、下層に黄褐色シルトブロックの混る暗褐色土層が堆積している。

土壇跡S X24は、発掘区南西壁際付近から発見された遺構である。土壇跡S X04との距離は約7m



第5圖 土壇跡S X04・24・16・07・08・S K05・S X06・19・S K09・柱穴跡S A25・26

・28・10

ある。平面形は0.41m×0.46mの胴が弓形になる方形状を呈し、深さは約28cmある。壁はほぼ垂直に掘削され、緩やかに窪む底面に至る。埋土は厚さ12～17cmの黄褐色砂質土と焼土の混る層を間にして、上層の黒色土層と下層の粘性黒褐色土層に分かれる。土壌は西側と南側で浅い落ち込みと重複するが、いずれも土壌が新しい。

土壌跡S X11は発掘区西側の溝跡S D20の北側から発見された遺構で、平面形は長軸を東西方向に有する楕円形を示す。規模は0.95m×0.63mで、この種ではもっとも大きい。深さ23cmある。壁面は緩やかに外傾し、そのまま底面に至る。埋土は2層に分かれ、主体は厚さ16cm前後の上層の焼土小ブロックの多量に混る黒褐色土層であり、下層は軟質灰褐色土層である。

土壌跡S X18は、土壌跡S X11の南東約70cmのところに隣接して発見された。平面形は径40cm前後の円形で、深さ11cmある。壁の掘削はやや外傾し、平坦な底面に至る。埋土は厚さ約6cmの焼土ブロックが多量に混る黒褐色土層を挟んで、上層に焼土ブロックが僅かに混る暗褐色土層、下層に黄褐色シルト崩壊土層が堆積している。

土壌跡S X14は、土壌跡S X18の南約1.2mのところから発見された。平面形はほぼ円形に近く、規模は0.5m×0.38m、深さ約10cmである。壁の掘削は外傾し、ほぼ平坦な底面に至る。埋土は中ほどを境に2層に分かれ、上層は黒褐色土層、下層が焼土ブロックが多量に混る黒色土層である。

土壌跡S X30は、発掘区東寄り南壁際付近から発見された。平面形は径約45cmのほぼ円形で、深さ約16cmある。壁は西側がほぼ垂直に、東側が緩傾斜に掘削され、平坦な底面に至る。埋土は暗褐色土単層で、灰と焼土が多量に混る。

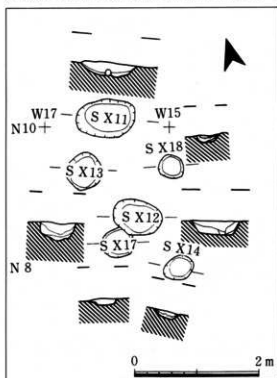
#### 土壌跡S X16・07・08・13・12・34・SK05 (第5・6・7図)

このグループは小土壇状に坑を穿ち、埋土には灰や焼土を含まない一群である。

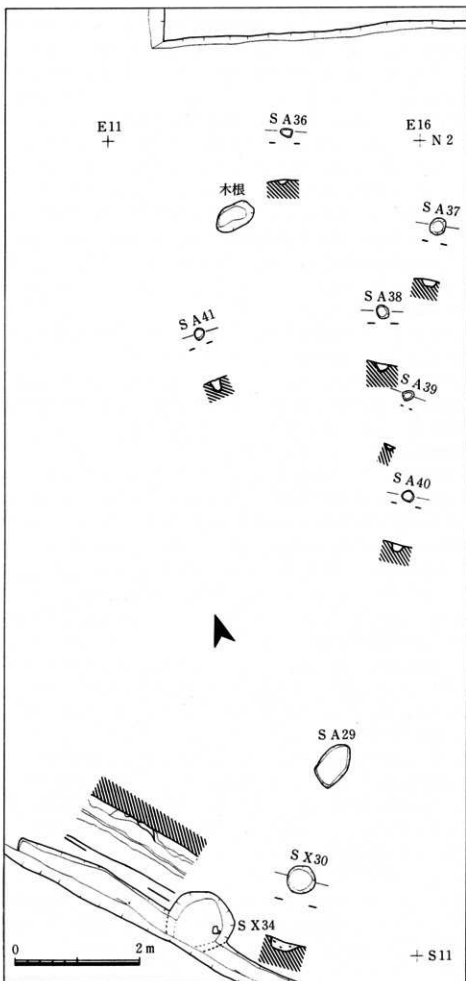
土壌跡S X16は発掘区西端部中央から発見されたもので、既述のS X04のすぐ西隣にある。平面形は0.78m×0.68mと、わずかに長軸を東西方向に有する楕円形を示し、深さ約16cmある。壁は西側が外傾し、東側がほぼ垂直に掘削され、緩やかに窪む底面に至る。埋土は上層に一部みられる黒色土層を除くと、軟質黒褐色土単層で、層中に黄褐色シルトブロックが混る。

土壌跡S X07は、土壌跡S X16の北東方約5mのところから発見された。平面形は隅丸長方形で、規模は1.02m×0.75mと長軸を北西—南西にとる。深さ約30cmある。壁面はすり鉢状に掘削され、狭い底面に至る。埋土は2層に分かれ、上層が黄褐色シルト粒が僅かに混る黒褐色土層、下層が本土壇の埋土主体となる黒色土層である。

土壌跡S X08は、土壌跡S X07の南東約4.5mのところから発見された。平面形は0.9m×0.77mで長軸を南北方向に有する楕円形を呈し、深さ約15cmある。壁は緩く外傾して浅く掘り込まれ、ほぼ平坦な底面に至る。埋土は底面近くの下層と埋土主体を占める上層に分かれる。上層は黄褐色シルト小ブロックが僅かに混る黒褐色土層、下層は厚さ2～3cmと薄い堆積の暗褐色土層である。



第6図 土壌跡S X11・18・14・13・12・17



第7図 SX30・  
34・SA41・36・37  
・38・39・40・29

土壇跡S X13は、発掘区西側の土壇跡S X11・18の西側から近接して発見された。平面形は隅丸方形に近いプランを示し、規模は0.55m×0.55m、深さは約30cmと、この種の小土壇では深い方である。壁はほぼ垂直に比較的にいいに掘削され、底面に至る。底はやや窪んでいる。埋土は3層に分かれ、上層が約17cmの厚さの黒褐色土層で、当埋土ではもっとも厚い。中層は黄褐色シルトブロックの混る黒色土層、下層は粘性の黄褐色シルト崩壊土の汚れの層である。

土壇跡S X12は、土壇跡S X13の南東55cmのところから発見された。平面形は長軸を東西方向に有する楕円形を示し、規模は0.8m×0.55mで、深さは22cmある。壁は外傾ぎみに掘削され、平坦な底面に至る。埋土は基本的に埋土中位を境に2層に分かれ、上層は黄褐色シルト小ブロックが僅かに混る黒褐色土層、下層が黄褐色シルトブロックが多量に混る軟質黒褐色土層である。

土壇跡S X34は、発掘区東寄り南壁際から発見された遺構で、既述の土壇跡S X30のすぐ南西のところにある。南半部は発掘区外にあるが、平面形は円形に近いと推定される。規模は東西約1mで、深さ約15cmある。壁は外傾して掘削され、やや不規則な底面に至る。埋土は南半部が不明だが、底面近くに軟質黒色土層が見られる。

土壇跡S K05は、発掘区西壁寄りのところから土壇跡S X16に東接して発見された。平面形の規模は0.8m×1.06mで、長軸を南北方向に有する楕円形を呈し、深さ約53cmある。この種の土壇ではもっとも深い。壁は外傾ぎみに掘削され、やや一方に傾く底面に至る。埋土は全体的に土質は締まり、4層に分かれる。上層から下層へ順に、黄褐色シルト粒僅かに混じる黒褐色土層、全体にサビ色がかかる黒褐色土層、シルト質褐色土層、シルト質灰黒褐色土層がある。

#### 土壇跡S X06・19・17 (第5・6園)

この土壇跡は、いずれも浅い掘り込みで、埋土は単層のグループである。

土壇跡S X06は、発掘区西壁寄りの土壇跡S K05の東約2mのところから発見された。平面形はやや重んだ楕円形で、長軸は南北方向にある。規模は0.55m×0.67mで、深さ約10cmある。壁は外傾ぎみに掘削され、緩く窪む底面に至る。埋土は褐色の強い黒褐色土である。

土壇跡S X19は、発掘区南西方から溝跡S D20の北壁と重複して発見された遺構で、S D20によって、土壇南壁プランが削平されている。平面形は不規則な長方形プランを呈し、規模は1m×0.75m、深さ約10cmある。壁は北壁寄りが外傾し、底面はほぼ平坦である。埋土は黒色土。土壇内北西寄りに小柱穴が重複して掘り込まれている。

土壇跡S X17は、発掘区西寄りから土壇跡S X12と重複して発見された遺構で、S X17の北壁プランがS X12によって壊される。平面形はほぼ円形に近い輪郭を示し、規模は0.52m×0.46m、深さ約10cmある。壁は外傾ぎみに掘削され、平坦な底面に至る。埋土は黒褐色土。

#### 土壇跡S K09・23 (第5・8園)

いずれも掘削の特長が深く、埋土中に多量の礫が混る、出土遺物皆無などの共通性がある。

土壇跡S K09は、発掘区西寄りの土壇跡S X08のすぐ東隣から発見された。平面形は長軸を南北方向に有する楕円形で、規模は0.86m×1.16m、深さ約60cmある。壁面はほぼ垂直にいいに掘削され、緩く窪む底面に至る。埋土は2層に大別され、主体は黒味の強い黒褐色土層で、拳大以下の礫が多量に混る。底面両壁際に黄褐色シルト崩壊土汚れの暗褐色土層がある。

土壇跡S K23は、発掘区中央やや北寄りのところから土壇跡S X15と重複して発見された。S X15西壁の一部がS K23の東壁上端を壊す。平面形はほぼ円形を呈し、規模は1.04m×1.02m、深さ約56cmある。壁はわずかに外傾するていどに掘削され、緩く窪む底面に至る。埋土状況は土壇跡S K09とまったく同じである。

#### 土壇跡SX15 (第8図)

土壇跡SK23と重複して、すぐ北側から発見された浅い掘り込み遺構で、SX15が新しい。平面形は長軸を東西方向に有する楕円形で、規模は3.05m×2.03m、深さ16cm以上ある。壁は大きく外傾し、緩やかに底面に至る。埋土は軟質黒色土層のみである。

#### 土壇跡SK21 (第8図)

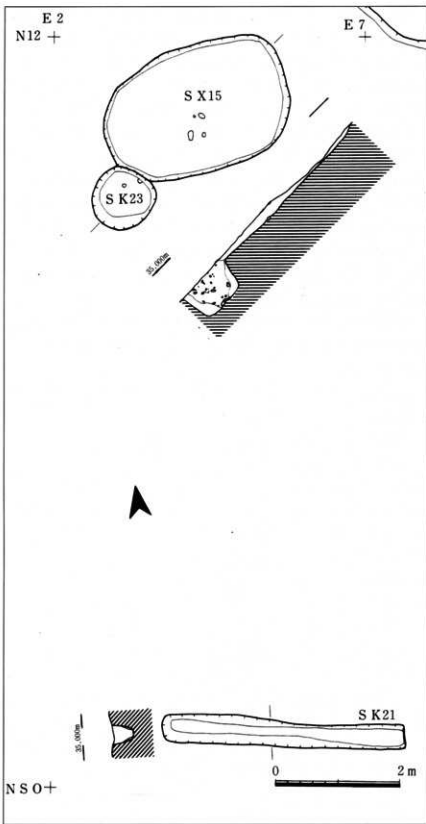
発掘区中ほどやや東寄りのところから発見されたTビット状遺構である。平面形は長軸を東西方向に有する隅丸長方形で、規模は3.9m×0.35~0.47m、深さ約35cmある。壁は断面箱笥研堀状に掘り込まれ、仕事もていぬいである。埋土は軟質黒色土単層だが、底面付近の壁際に黄褐色シルトの崩壊土が見られる。

#### 柱穴跡SA25・26・28・10 (第5図)

柱穴跡SA25は発掘区南西隅付近の土壇跡SX24の東約1.6mのところから発見された。形態はやや東西に長い隅丸長方形を呈し、掘り方の大きさは0.3m×0.23m、深さ約25cmある。掘り方の壁は

ほぼ垂直に掘られるが、掘り方底は丸く窪む。埋土は基本的に上層が固く締まった黒褐色土で、下層が軟質黒褐色土である。埋土中及び断面に柱当たり痕跡は認められない。また他の柱穴と組み合わせか不明である。

柱穴跡SA26は、発掘区南西寄りから発見された南北方向に延びる柱列跡で、都合2柱間分を検出



第8図 SK23・SX15・SK21



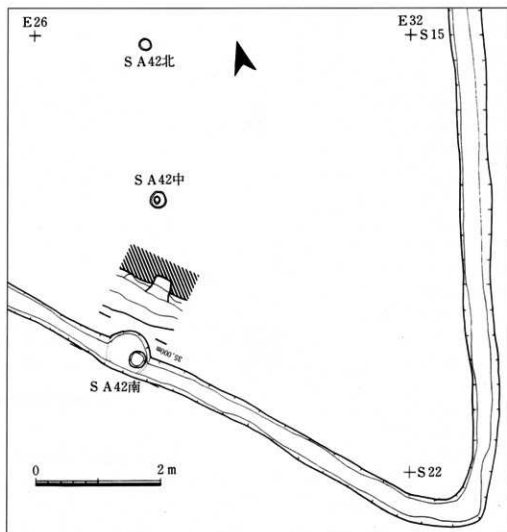
している。柱掘り方の北端は、土壇跡S K05の東側に、南端は土壇跡S X19の西に隣接してある。柱間寸法は柱穴跡心々で、北から4.52m、4.00mを測る。柱掘り方は楕円形か円形を呈し、大きさは北から0.3m×0.4m、深さ21cm、0.24m×0.2m、深さ14cm、径0.17~0.18m、深さ7cmある。掘り方の壁の掘削は一定せず、北端は外傾、中柱はややていねいで垂直さみ、南端は浅い掘り込み状をそれぞれ呈する。埋土は固く締まった黒褐色土が基本である。いずれも柱当り痕跡は認められない。

柱穴跡S A28は、柱列跡S A26中柱の南東1.5mのところから発見された。形態は四辺が緩く弧を描く隅丸形状を示し、掘り方の大きさは0.36m×0.42m、深さ約35cmある。掘り方の壁はほぼ垂直に掘られるが、柱底は丸く窪む。柱当りの径は6~7cmで、掘り方上端をやや広く掘って抜き取っている。掘り方埋土は粘性のある褐色土、抜き取り痕跡には黒褐色土が堆積し、中に土器片と炭化物小ブロックが混在する。他の柱穴と組み合わせるかは不明である。

柱穴跡S A10は、既述の土壇跡S K09のすぐ西側から発見された。形態は南北方向に長い楕円形を示し、掘り方の大きさは0.3m×0.45m、深さ約5cmある。壁は緩やかに外傾し、底面に至る。埋土は褐色さみの黒褐色土で、柱当りは認められない。

#### 柱穴跡S A41・36・37・38・39・40・29・42 (第7・9図)

発掘区東半部から発見された柱穴群で、S A42の柱列跡を除くと、すべて建物跡や柱列跡としてまとまるものはない。



第9図 柱穴跡S A42

柱穴跡S A41は、土壌跡S K21の南東約5mのところから発見された。形態は円形で、径約15cm、深さ約20cmある。壁はわずかに外傾して、丸い掘り方底に至る。埋土は黒褐色で、柱当りは認められない。

柱穴跡S A36は、土壌跡S K21の北東方、発掘区北壁際付近から発見された。形態は不整形円形で、径15~20cm、深さ約9cmある。壁の断面はV字状を呈し、浅い掘り込みである。埋土は黒褐色土、柱当りは認められない。

柱穴跡S A37は、柱穴跡S A36の南東方約2.7mのところから発見された。形態は円形で、径25~30cm、深さ約11cmある。壁の断面は逆台形を示し、浅い掘り込みである。埋土は黒褐色土で、柱当りは認められない。

柱穴跡S A38は、柱穴跡S A37の南西約1.4mのところから発見された。形態は円形で、径約22cm、深さ約14cmある。壁の断面はU字状を示す。埋土は軟質黒褐色土で、柱当りは認められない。

柱穴跡S A39は、柱穴跡S A38の南約1.2mのところにある。形態は不整形円形で、径16~20cm、深さ約7cmある。壁の掘削は、S A36と同じである。埋土は黒褐色土が主体で、下層に黄褐色シルト崩壊土が混る。柱当りは認められない。

柱穴跡S A40は、柱穴跡S A39の南約1.5mのところにある。形態は円形で、径約20cm、深さ約12cmある。壁の掘削は、S A38と同じ。埋土は黒褐色土で、柱当りは認められない。

柱穴跡S A29は、発掘区東寄り南壁際付近の土壌跡S X30の北側から発見された。平面形は不整形長方形を呈し、大きさは46cm×73cm、深さ20cmある。壁の掘削は比較的いねいで、垂直ぎみに掘り込まれ、掘り方底に至る。埋土は固い黒褐色土の上層と、軟質の茶色ぎみの黒褐色土の下層に分かれる。

柱穴跡S A42は、発掘区南東隅壁際付近から発見された南北方向に延びる柱列跡で、都合2柱間分を検出した。柱掘り方の形態はいずれも円形で、北柱の径約20cm、中柱・南柱の径は約27cmある。深さは17cm以上ある。中柱掘り方に径10cm前後の柱当りが認められる。柱間寸法は柱穴跡々々で、北から2.49m、2.58mを測る。掘り方は比較的いねいに掘られ、壁が立つ。埋土は軟質黒褐色シルト。

### Ⅲ. 遺物

発掘調査で出土した遺物には、古銭、木製品、土師器、須恵器、鉄製品などがある(第10図)。以下、遺構ごとに記述する。

跡体車堂Ⅱ遺跡発掘調査の遺構検出の過程で多くの土師器、須恵器の破片が出土している。とくに地上上の遺構検出面からの出土が多い。またこの中には縄文土器胴部破片も僅かだが混じっている。土師器の傾向は、土師器では甕胴部破片がもっとも多く20点以上ある。すべて胴部にロクロ調整痕をとどめる。甕口縁部片は1点で、これもロクロ調整痕がある。土師器杯は4点の破片があり、口縁部と底部片各1、他は体部片である。すべて内面黒色処理され、底部外面は糸切り無調整である。

須恵器では中型~大型の甕胴部破片が6点、杯口縁部片が6点、同底部片が1点ある。うち口縁部は焼成堅緻で、色調、胎土が同じことから、同一個体の破片か同一産地の破片の可能性が有る。杯底部はへら切り無調整のものである。

#### 溝跡S D01出土遺物(第10図1~4)

埋土中から大量の土師器、須恵器の破片とともに、桶蓋、板材、木杭などの木製品と寛永通寶の古銭が出土している。

桶蓋は足場板材、木杭とともに、この溝出土遺物の中でもっとも新しい。桶蓋は直径25cm、厚1.5cmあり、半截された状態で出土した。蓋縁辺寄りに直径3cmの円孔があく。足場板については遺構の項を参照のこと。木杭2本は溝底から出土した。1本は長さ37cm、巾3cmのもので、杭状に立割ったまま面取りはしない。一方の先端を3面に尖らしている。他の1本は長さ23cm、巾3cmあり、加工法は既述の杭と同様である。

古銭は7枚の寛永通寶(裏表紙拓影図)で、溝の南西端北岸底から一括で出土した。直径2.3cm~2.4cmある。うち5枚は錆付いて離れない。

土器は比較的須恵器甕胴部破片が多い。器種は大型と中型とがあり、外に中型甕口縁部片が1点ある。図示したものは甕胴部片の代表的事例と須恵器杯の例である。

1は甕の胴部片で、外面は平行叩き目文を交叉させ、内面はやや目の粗い平行叩き目文を当てている。焼成は堅緻で、外面はネズミ色、内面は明るいネズミ色を呈す。器壁は1cm内外の厚さがある。2も1と同様の器種で、外面は平行叩き、内面は円弧状を有する当て具痕をとどめる。焼成は堅緻で、外面は暗いネズミ色、内面は明るいネズミ色を示す。器壁は1より僅かに薄い。

3・4は須恵器杯である。3は底部径5.1cm、焼成堅緻で、内外暗いネズミ色を示す。切り離し手法は糸切り無調整である。4は底部縁辺を打ち欠いて円盤状にしたもので、径6.4cmある。焼成堅緻で、色調は明灰褐色を示す。

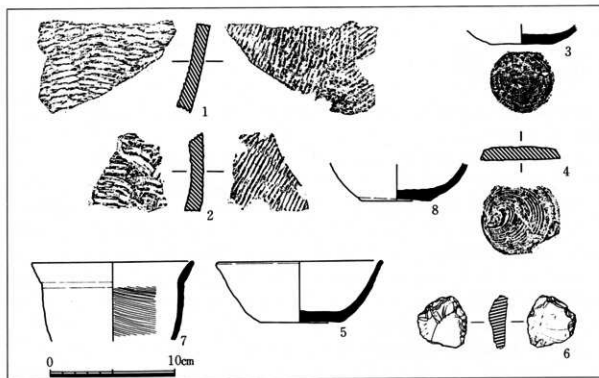
溝跡S D02・20・03・22からは遺物は出土していない。

#### 土壌跡S X04・24・11・18・30出土遺物(第10図)

いわゆる焼土遺構群で、S X14を除いて焼土層から遺物が出土している。

土壌跡S X04からは土師器甕胴部の破片が2点出土している。成形及び調整にロクロを利用(以下、ロクロ甕と呼ぶ)し、うち1点は内面ロクロによる掻き目、外面はタテ方向の削り調整を行う。

S X24からは須恵器杯、土師器ロクロ甕口縁端部片1点が出土している。須恵器杯の5はほぼ完形



第10図 紡体車堂Ⅱ遺跡出土遺物実測図

で、口径13.6cm、器高4.9cm、底径6.5cmある。焼成・胎土ともに良く、底部は糸切り無調整である。他に杯体部片が2点あるが、同一個体と推定され、焼成はやや弱い。

S X11からは磨滅の著しい土師器のロクロ甕底部片が1点、同じく非ロクロ甕の胴部片が1点出土している。後者は口縁部下端から胴部上半にかけて遺存するもので、口縁部は横ナデ、胴部外面は斜位方向に小口による浅い刷毛目調整、内面は横位の刷毛目調整を施す。

S X18からは土師器ロクロ甕胴部片1点と同じく非ロクロ甕胴部片下端から底部へかけての破片が2点、それに石器が1点出土している。ロクロ甕は外面タテ方向の削り、内面ロクロ回転による掻き目調整が行われる。非ロクロ甕は、内面を密に小口による刷毛目調整を行う。6は唯一の石器で、頁岩製の掻器の基部である。現存幅3.9cm、長さ3.9cm、厚さ1.3cmある。

S X30からは土師器ロクロ甕胴部片が3点出土し、うち2点は焼成の良好な同一個体である。

#### 土壌跡S X16・08・13・12・34出土遺物 (第10図)

S X07・05を除いて、土師器、須恵器、縄文土器が出土している。

土壌跡S X16からは黒褐色土層から11点の土器片が出土した。うち須恵器は口縁部から体部下方にかけての器壁の薄い杯片が1点ある。焼成は良く、灰白色を呈する。他はすべて土師器ロクロ甕の破片で、うち6点は大型の甕の口縁部から胴部にかけての破片である。

S X08上層の黒褐色土層からは約20点の土器が出土した。多くが土師器で、須恵器は4点である。土師器には甕と杯があり、前者にはロクロ甕と非ロクロ甕がある。ロクロ甕は他の通例のそれと同様で、胴部をタテないし斜位にヘラ削りし、器壁を調整する。中には明白灰色に焼き上った陶質を呈する甕もある。7は、非ロクロ甕の短い口縁部が僅かに外反する破片で、内外に煤が付着している。口縁部は弱い横ナデ、外面はタテ方向ヘラ削り、内面は頸部から胴部へ密に横ナデが施される。土師器杯は口縁部と体部の破片が各1点あり、内面黒色処理される。須恵器4点のうち、杯片が3、甕胴部小片1点がある。杯はいずれも口縁部を欠くが、8は底径5.5cmで糸切り無調整。他に外面に火樺のある焼成堅緻な糸切り無調整のものがある。甕胴部片では外面は磨滅ぎみの平行叩き目文で、焼成は堅緻である。

S X13は上層の黒褐色土層から土師器と須恵器が各1点出土している。土師器は小型のロクロ甕胴部片、須恵器は杯口縁部片で器壁は比較的薄く、焼成は堅緻である。

S X12は上層の黒褐色土層から土師器と須恵器の細片が3点出土している。土師器は甕胴部片1点で、緩いロクロ回転調整を施す。須恵器は2点ともに杯底部片で、糸切り無調整、焼成堅緻である。

S X34は軟質黒色土層から土師器4点、縄文土器1点が出土している。縄文土器は器面の荒れた甕胴部片である。土師器は磨滅の著しい長甕胴部片、甕底部片がある。長甕の内面はタテ方向に目の細かい刷毛目による調整がみられる。

#### 土壌跡S X06・19・17出土遺物

いずれも埋土は黒褐色土ないし黒色土の単層である。

土壌跡S X06からは土師器杯片1、須恵器杯片2点が出土している。前者は底部片で、見込みは放射状ミガキ、内黒処理、糸切り無調整。後者は体部片と体部から底部へかけての破片で、糸切り無調整、焼成堅緻、外面に火樺痕をとどめる。

S X19からは土師器細片50点、須恵器片22点が一括で出土している。土師器には甕、杯片があるが器形の同えるものはない。1点は内面黒色処理した杯口縁部片がある。須恵器の大半は甕胴部片で、ほとんどが外面平行叩きである。また中型の甕の頸部から肩部にかけてのものと、碗形の糸切り無調整のものがある。

S X17からは刀子状の鉄器破片が出土している。両端を欠損するが、現存長5.4cm、現存幅は基部寄り1cm、先端部寄りで0.8cmある。全体に錆が付着している。

土壌跡S K09・23からは遺物は出土していない。

#### 土壌跡S X15出土遺物

埋土は黒色土の単層である。土師器ロクロ甕胴部片1点がある。磨滅が著しく、器壁も0.3~0.4cmと薄い。

土壌跡S K21の出土遺物はない。

#### 柱穴跡S A28出土遺物

柱穴跡ではS A28が唯一、遺物を出土している。埋土は上層の黒褐色土層で、土師器杯片、須恵器杯片各2点がある。土師器は細片、須恵器は杯体部片で、同一個体と推定される。

## IV. まとめ

本遺跡の中央付近を南西から北東へかけて流れる溝跡S D01は、当地域の水田の耕地整理事業が昭和20年代後半に実施され、埋め戻されるまでは機能していたもので、農業用水路兼洗い場に利用されていたという。足場板やその他の木製品の存在はそれを裏付けるし、用水路として溝の掘削が意外に早く、江戸時代まで遡ることは、寛永通寶が溝の南西端北岸下部から一括で出土したことから明らかである。

溝跡S D02からの出土遺物がないので詳細は不明だが、重複関係からS D01の流路を一部手直しして溝跡S D02を掘削していることは明らかである。

本遺跡の特長のひとつに土壌が多いことを指摘できる。このうち、S K09・23は断面ピーカー状に深く掘り下げ、埋土中に多量の礫が混入するという共通性があり、出土遺物皆無ということは、平安期の他の遺構掘削時には、当土壌はすでに埋没していた可能性が考えられ、これらの諸特徴から当地方の縄文時代中期から後期に多い、貯蔵穴の一種と推定できる。このことは、土壌跡S K21のいわゆるTピットについても同様である。

上述の土壌を除くと、出土遺物から他は基本的にすべて平安時代のものということができる。このうち、埋土中に焼土や炭化物を多く含む土壌跡S X04・24・11・18・14・30は同一グループに属し、このような土壌の使われ方の類例に資料を追加したといえる。いわゆる焼土遺構B-b)①類で、一般的にいて、この類例は集落の端か縁辺部に設けられることが多い。

今回の発掘調査では、平安時代集落の縁辺の一部の使用形態を明らかにしたといえよう。

註1 伊藤博幸「岩手県水沢市常盤広町遺跡」(『日本考古学年報(1988年度版)』41、1990年)404-406ページ。

伊藤博幸「弥生水田跡発掘調査現地説明会資料-常盤広町遺跡」(水沢市教育委員会、1989年)

註2 林前遺跡については次の文献がある。

- 新田 賢・伊藤博幸外「林前遺跡-区画整理に伴う範囲確認調査-」水沢市文化財報告書第3集(水沢市教育委員会、1979年)
- 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一「水沢遺跡群範囲確認調査-昭和60年度発掘調査概報-」水沢市文化財報告書第15集(水沢市教育委員会、1986年)
- 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一「水沢遺跡群範囲確認調査-昭和62年度発掘調査概報-」水沢市文化財報告書第18集(水沢市教育委員会、1988年)

- d 伊藤博幸・佐久間賢・及川 洵「水沢遺跡群範囲確認調査—平成3年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第23集（水沢市教育委員会、1992年）
  - e 及川 洵・伊藤博幸外「水沢遺跡群範囲確認調査—平成4年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第25集（水沢市教育委員会、1993年）
  - f 及川 洵・伊藤博幸・池田明朗「水沢遺跡群範囲確認調査—平成5年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第27集（水沢市教育委員会、1994年）
- 註3 伊藤博幸・佐久間賢外「水沢遺跡群範囲確認調査—昭和63年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第19集（水沢市教育委員会、1989年）
- 註4 焼土遺構の分類については先に検討したことがある。伊藤・佐久間外「水沢遺跡群範囲確認調査—平成元年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第21集（水沢市教育委員会、1990年）

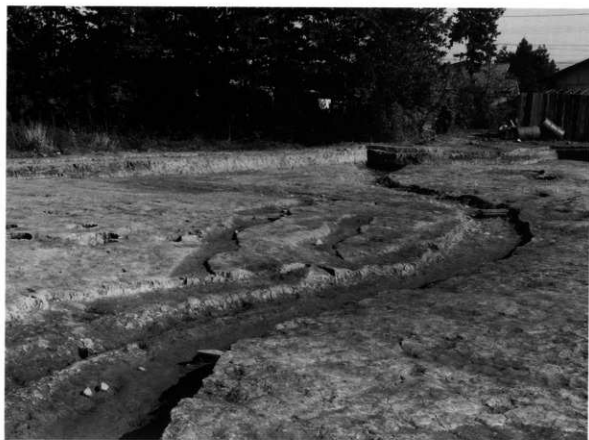
- d 伊藤博幸・佐久間賢・及川 洵『水沢遺跡群範囲確認調査—平成3年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第23集（水沢市教育委員会、1992年）
  - e 及川 洵・伊藤博幸外『水沢遺跡群範囲確認調査—平成4年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第25集（水沢市教育委員会、1993年）
  - f 及川 洵・伊藤博幸・池田明朗『水沢遺跡群範囲確認調査—平成5年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第27集（水沢市教育委員会、1994年）
- 註3 伊藤博幸・佐久間賢外『水沢遺跡群範囲確認調査—昭和63年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第19集（水沢市教育委員会、1989年）
- 註4 焼土遺構の分類については先に検討したことがある。伊藤・佐久間外『水沢遺跡群範囲確認調査—平成元年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第21集（水沢市教育委員会、1990年）

写真図版





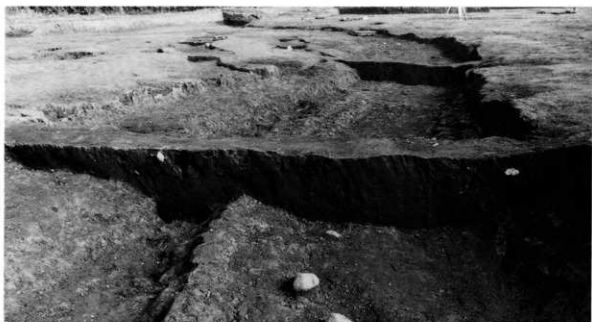
图版 1 发掘区全景写真



図版 2 上 発掘区全景(西から) 下 溝跡SD01・02・20・03・22(南西から)



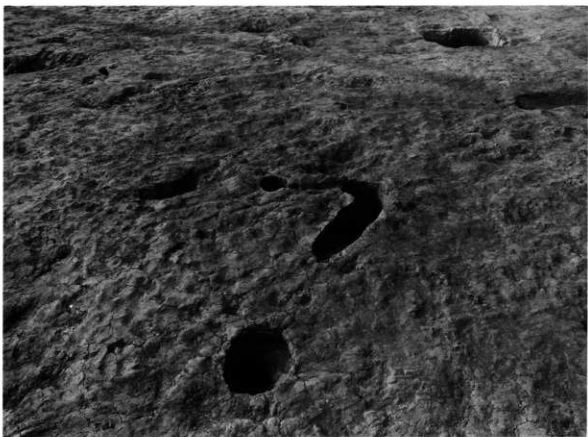
図版3 上 溝跡SD01・20・03・22 下 溝跡全景(南西から)



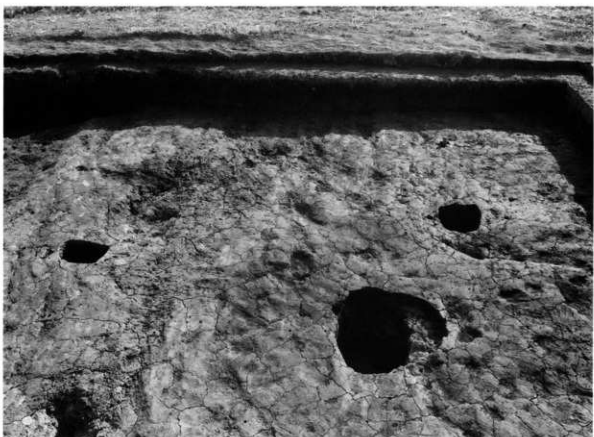
図版4 上 溝跡全景(東から) 下 溝跡SD01・02・20立割り状況(西から)



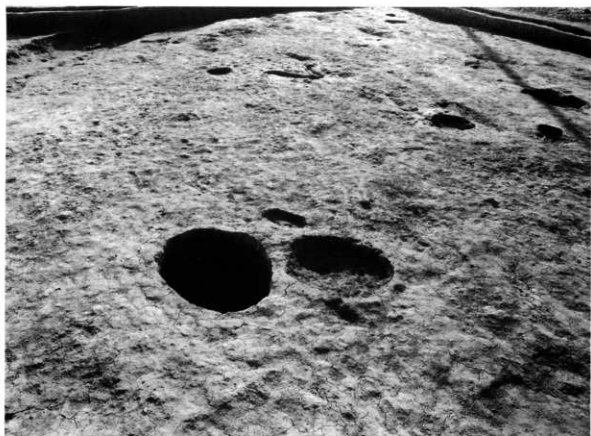
图版 5 上 土壤跡 SX16・04 下 土壤跡 SX04・16・SK05



图版 6 上 土壤跡SX11-14·17·18 下 土壤跡SX12·14·17

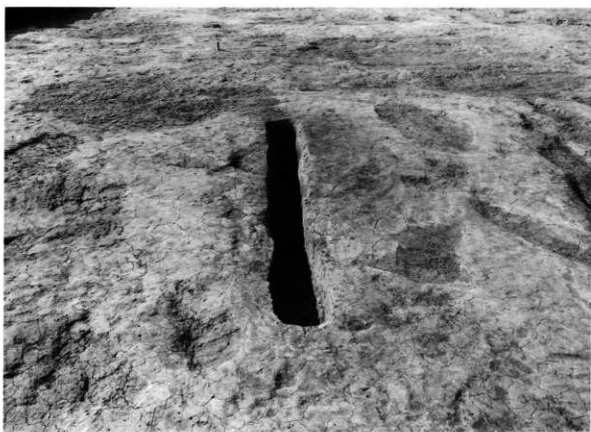
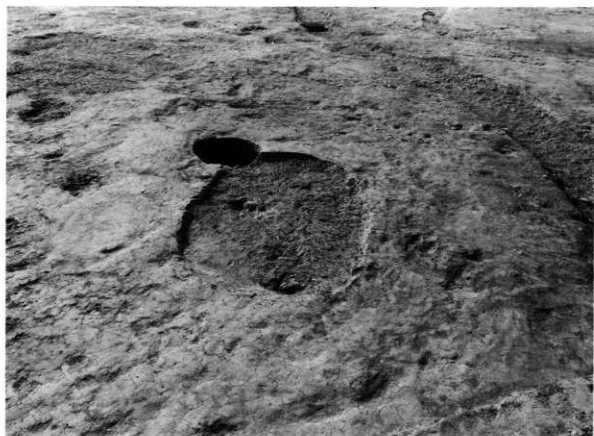


図版7 上 土壇跡SK07 下 柱穴跡・SA19・25・土壇跡SX24



图版 8 上 土壤跡 SX08・09・10 下 同立割り状況





圖版 9 上 土壙跡SK23·SX15 下 土壙跡SK21



図版10 土壇跡立割り状況 上からSX11・SX08・09・10・SX12



図版11 土坑跡立割り状況 上からSX16・SX07・SK05

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第3集

## 姉体車堂Ⅱ遺跡

平成7年3月31日 発行

編集 / 発行 財団法人 水沢市文化振興財団  
水沢市埋蔵文化財調査センター  
〒023 水沢市佐倉河字九蔵田96-1  
電話 0197-22-4400  
FAX 0197-22-4600

印刷 有限会社 あべ印刷  
電話 0197-24-8303  
FAX 0197-24-8330

